

桜庭雲水

Sakuraba
Unsui

般若心經と
生命科学

『Boon-gate』のPDF作品を ご覧いただく前に…

操作について

- 作品の多くは「もくじ」のページで、進みたいページの項目を押せば、そのページまでジャンプし、また、ジャンプしたページのタイトルを押せば、目次のページに戻るよう設定しております。
- 直前に開いていたページに戻るには、画面上の「◀」ボタンで、直前に開いていたページに戻ります。

読み方いろいろ

- 通常は画面の「倍率」が100%前後になっていますが、「倍率」を150%まで高めると文字が読みやすい大きさになります。
- 通常は「見開きページ」で設定されていますが、「単一ページ」にすると読みやすく感じます。
- 読み進めるときは、「十字キー」を使用すると手軽です。
- 「サムネイル機能」を使用して読み進めると、2～3頁からとばし読みするのに便利です。
- 頁を「回転」させることが可能です。地図などを拡大して見るときに便利です。

http://www.bungeisha.com/PDF_is/05-top1.html でPDF作品についての説明を致しております。ご参照ください。

桜庭雲水

Sakuraba
Unsui

般若心經と
生命科学

まえがき

私が『般若心経と生命科学』という本を書こうと思い立つたきっかけは、いま振り返ってみると、約十年ほど前に、何かの本で理論物理学者アルバート・アインシュタイン博士のことに^{であ}出逢ったことが大きな理由であります。それ以来、そのことが頭から離れることがありません。本書中にも何度も引用させていただいておりますそれは、次のようなことです。

「宗教のない科学は不具、科学のない宗教は盲目」

宗教と科学の相^そ依^う性^{しやう}を示すことばですが、そうしたことを意識させる仏教に、私が関心をもったのは、第二次世界大戦も終わりに近づいた、昭和二十年頃であったと思います。この年私は、小学校を卒業してすぐに、神奈川県相模原にあった陸軍造兵廠に就職しました。しかし、とても仕事などする状況ではありませんでした。連日、アメリカ軍機による空襲があり、二、三時間おきに防空壕を出入りするという慌しい日々でした。結局、逃げ

回りの六カ月が過ぎて八月十五日を迎えることになったのです。

私の両親は仏教信仰の篤い^{あつ}人でした。そんな両親のもと、私は自然に仏教書に親しむようになつていました。といつても、十五、六歳の子供に理解できる宗教は、苦しいときの神頼みの期待感に似た信仰でありましょう。そのようにして身についた信仰心が細々と六十余年続いているというわけです。まさに「日暮れて道遠し」の感があります。

その程度の信仰でしかない私の仏教観の中に、突然、科学が飛び込んできたのです。さきほど紹介したアインシュタインのことばです。そのショックは大きなものでした。

よく考えてみますと、仏教とは、私たち人間を心の苦しみから救い出して人生を幸せに導く教えといわれておりますが、科学の方もまた、物質の本質や特質を究めて、人類や他の生命あるもののために役立てるといふ目的をもっていることがわかります。そのとき私には、仏教も科学も、究極的には同じ目的をもつと思われたのです。仏教は、人間の心のもち方を改革して、それを調和し、人類すべての理想である共存共栄に導くことを、また科学は、すべての物質を究めて、すべてのものの調和に役立てることを理想としているではなからうかと。

登山道は異なつていても、目指す理想とする頂上は同じだったというわけであります。

だからこそアインシュタイン博士は、「宗教性のない科学」と「科学性のない宗教」はいずれも、「不完全」であると喝破し、私たちに示されたのです。

科学の追い求めるものは、物質に対する究極の知識でありましょう。しかし、その知識も私たち人類がその使い方を誤ると大変な事態を招くだろうことは、誰もが認めるところです。科学の知識を人類の幸福のために、正しく使用するために、正しい人格が求められていることを理解しなければなりません。いま、世界中に数万個あるといわれている原・水爆などは、その最たるものではないでしょうか。

人類の滅亡にもつながるような、これらの恐ろしい兵器を、人類はどのように管理しようというのでしょうか。アインシュタイン博士はさきほどあげたことば以外にも、私たち人類に警鐘を鳴らすことばを遺しております。

「私たちは、知性を神格化しないよう、充分に注意しなければなりません」

「知性は強力な筋肉をもっていますが、人格はもっていないのです」

いま私たちは、政治も、経済も、社会も、明日がよく見えない状況の中で、色濃く漂う閉塞感に包まれています。例えば、国際的な宗教対立の問題、異常災害、異常気象、原爆いじり、生活面においては、大量生産、大量消費、大量廃棄、そして、超がつくような異常犯罪の多発などが四囲を暗くします。これらの問題の解決には、一国一地域だけではなく、いずれも国際的な取り組みが望まれるところです。

二十世紀は戦争の世紀でした。そして、平和が望まれた二十一世紀もまた、ニューヨークにおける大規模テロという未曾有の惨劇で幕を開けました。環境破壊も世界中の国々や人々がともに考えなければならぬほど拡大しています。人類がいまほど真摯に反省することを求められている時代はないのではないのでしょうか。

私たちはこの辺で一度立ち止まって、自分たちのこれまでの生きざまを振り返ってみるべきではないでしょうか。

人類がこれまでと同じ生き方を続けていくならば、やがて、最後の審判ならぬ、最後の世界大戦の危険さ、現実のものとなる匂いがしています。私たち人類はいまこそ、共存共栄の道を真剣にさぐる努力をするべきであります。このままでは、二十一世紀もまた、地球上には「赤信号」の点滅状態が続きます。どちらを向いても不安材料で一杯で

す。

二十世紀にはなかつた不安も増えています。新たな経済的台頭を示す大国があります。中国などです。中国の好景気は好ましいことです。しかし、喜んでばかりもいられませんが。バブルはいつはじけても不思議ではないでしょう。人口十二億の中国の動きは世界経済に大きな影響を及ぼします。その中国が共產主義政権であることも忘れてはなりません。私たちの住む日本に強い影響を及ぼす隣国であることを忘れて、一緒に踊っているわけにはいかないことを理解しなければなりません。

二十一世紀は低成長時代といわれています。私たちの生き方もそれに応じて変わらなければならぬ道理です。大量消費の時代は終わり、競争社会は限界にきていることを認め、自らの行動を制御する勇気が必要です。「鹿を追う猟師、山を見ず」のこともあります。終わることのない欲望と執着に振り回されず、自らの足元や周囲をじっくりと見渡す心の余裕が求められましょう。弱肉強食という価値観と「執着」という心に潜む欲望を捨てたとき、新しい道が必ず見えてくるはずですよ。

それには、人類が数百万年にわたって残してきた「遺伝子中の智慧」が役立つのです。私たちの三十億ともいわれる遺伝情報には祖先から受け継いだ智慧が刻まれています。遺

伝情報は、DNAのらせん構造のテープに書き込まれていることが、生命科学の研究により明らかにされています。生命科学の分野は日進月歩の発展を続けています。世界中の生命科学者たちが競い合って、生命の不思議を研究しているのです。その過程で、宗教に関わる事柄、例えば「釈尊の悟りの本質」や、生命とは何か、生の目的、死の意味などについて明らかにすることは間違いないと考えられます。二十一世紀の早い段階に、私たちの目の前に示されるのではないのでしょうか。

本書では、仏教と科学がどのように歩み寄り、お互いがどのように補完しあうかという相依性の姿の一端を紹介したいと考えています。とくに、仏教においては『般若心経』にある釈尊の教え、大乘仏教の論理を基本に置き、科学との連関を明らかにしたいと考えています。

なお、本文中では、多くの文献を参考にさせていただいています。ここに、先人の業績に深く感謝の意を表します。その主なものは、巻末に収載させていただきました。

二〇〇六年四月

桜庭雲水（茂）

目次

まえがき 3

第一章 大乘仏教の根幹 11

第二章 『般若波羅蜜多心経』の真髓 55

第三章 大乘仏教のこころ「中道」 105

第四章 仏教と生命科学 175

第五章 水の姿に人生を学ぶ 243

第一章 大乘仏教の根幹

仏教の目的とは、人生の目的

正しい宗教とは本来、科学的にも正しい方向を目指していなければなりません。科学もまた、正しい宗教性を指向していなければ、人類の幸福に役立つことができません。科学もいうなれば、科学的に正しいことは、宗教的にも正しくなければならず、また、宗教的に正しいことは、科学的にも正しい方向性を求められているということでありましよう。

仏教の信仰なり目的なりには、社会的に見ても、個人的に見ても、そこには進歩・発展があつて、最初に目的としていたことと、中頃の目的と、最終的な目的とは違いがあり、変化・発展が考えられるのであります。それは宗教信仰の中に、幼稚で低級な段階と、それより高いレベルと、きわめて高い段階とがあるということです。

これを学校教育に譬たとえますならば、幼稚園や小学校のように初級のもの、中学校や高校のように中級程度のもの、大学や大学院のように高い段階のものというようになりましよう。大きく分けてほしい三つに分けられると思われます。第一段階の信仰とは、苦

しいときの神頼み的な信仰ではないかと思うのです。第二段階の信仰とは、精神の健康管理的な信仰であります。第三段階の信仰とは、仏教者としての究極の理想的信仰であります。自らの幸福だけを目指すものではありません。世界の人々の永遠の平和と幸せとを希求して利他行りたぎょうに生き、菩薩行ぼさつぎょうを希求するという究極的な理想の信仰であります。この三つのそれぞれの段階について考えてみたいと思います。

宗教信仰の最初の一步

まず第一段階の宗教信仰の出発点ですが、神や仏にすぎるといふ宗教信仰がどうして起こるかといえ、私たちの現実世界に苦しみがあるからであります。

文明の発達していない未開の時代でも、人は病気になるったり、天変地異に遭ったりして不幸に見舞われたときには、人は神に祈りを捧げて災難を免れたいと願うのであります。未開の宗教はこのように、現実じつじに襲いかかってくる不幸や災難を、神という人間を超えた偉大な力をもったものを想定して取り除いてもらうための祈りであり、行事であります。今日のような文明社会においても、病気や貧乏などで苦しんでいる場合に、宗教信仰に

よって、これを解決しようとするのがよくあります。

また、山登りとか、航海などで身の危険を感じたときとかに、また入学や就職の試験を受けるときなどに、神や仏に祈ることがよくあります。新興宗教や現世利益の神の信仰などが繁盛しているのはそのためでありましょう。

医術が発達していない未開の時代ならばともかく、医術が進歩し、科学技術が発達し、さまざまな治療を選択できる今日では、病気になれば医者にかかれればよいではないかということになりましたが、治療費のないような貧しい病人が、簡単な神霊療法やご祈禱きとうなどによって丈夫になったという例もありましょう。

また、近代医学で治らなかつた病気が、宗教信仰によって治つたという例もあると思います。このような点から見れば、新興宗教なども、単に迷信などといって片付けられないことにもなりましょう。

また、経済的に恵まれて、いかなる近代的設備の医療でも受けられるような人でも、命取りの病気にかかったり、危険な手術を受けたり、また、難産であつたりする場合には、近代的手術や医療を受けているとしても、なお心に不安があるときには、本人だけでなく、周囲の人も含めて神や仏に祈るといふことにもなりましょう。したがって、病気は医

者で、貧乏は経済的支援や社会保障で解決できるといっても、それだけではどうにもならず、信仰に身を委ねることもあります。そのことによって心を安らかにし、元気をつけることによって病気も治り、貧乏も解決するという場合もあるということではないでしょうか。

ここに、「どんなに科学が発達しても、宗教信仰がすたれない」ということの原因があると思われます。神や仏に祈ったからといって病気が必ず治るとか、入学や就職が簡単に行き、あるいは試験が必ず受かるなどということはないのですが、少なくとも神や仏に助けてもらえるという確信や信念がその人を元気づけることはあるようです。心の不安を解消することによって、その人は安心して治療を受けることができ、また、落ち着いて試験を受けることによって、信仰や信念がない場合よりも良い結果を得ることの確率が高くなるといえるのではないのでしょうか。心の安定が得られたことにより、良い結果が出たということがあります。以上が、第一段階の宗教信仰であります。このように第一段階の信仰は、目の前の、現実の苦しみを取り除くためのものであります。

「苦しいときの神頼み」というわけであります。しかし、このような信仰は、現実の苦しみがなくなれば、同時に神仏への信仰も不要となり、おろそかになってしまふと思われま

す。

これを医者の治療に譬えるならば、第一段階の信仰は、どこか体が悪いときに医者にかかるのに似ています。つまり、歯が痛めば歯医者に、お腹の具合が悪いときには内科医に、怪我のときは外科医にという具合であります。それぞれの病気によって専門の治療を受けるのでありますが、病気が治れば医者はいらなくなります。

これと同じく、病気や貧乏などで悩んでいるときには信仰に熱中しているのですが、信仰のお蔭で苦しみや悩みが解決されれば、もはや、神も仏もいらなくなります。

つまり、第一段階の信仰は部分的であり、一時的なものであるということです。

宗教信仰の第二段階

ところが、第二段階の信仰となりますと、全体的で継続的なものとなります。これを医者の治療に譬えてみるならば、先の第一段階は対症療法的であり、第二段階は全体療法的であるといえましょう。第一段階の目的は現在の病気そのものを治すことであり、病気の症状の出ている部分だけを治せばよいのですが、第二段階では徹底的に治療をするため

に、その病気の根本的な原因を取り除き、身体全体を治すようにするのであります。病気として表面に表れている枝葉のような症状だけを改善する治療を施しても、その根元を治さない限りは、その病気を根治することができないのであります。西洋医学の局所的な対症療法に対して、東洋医学的な全体療法的な信仰が第二段階的であります。

言葉を代えていうならば、第一段階は症状を改善するという「消極的」なものであるのに対して、第二段階は健康を増進し、病気を予防することにつながる原因除去という「積極的」なものとすることができます。

真の健康というものは、症状が改善されただけでは充分ではないのです。手術、注射、服薬、という直接的な療法だけでなく、睡眠、栄養、運動、そして規則的な生活などの間接的な方法がこれに協力し、これによって、本然的な健康が得られなければなりません。このようにして健康を増進するだけではなく、さらに病気にかからないような病氣予防の措置を講ずることが必要なのであります。そこでは、消極的な治療から積極的な健康管理へと進んでゆくのであります。

宗教信仰の場合にも、第二段階においては、現実の苦しみや悩みを、部分的に一時的に癒すための信仰ではなく、信仰によってあらゆる苦しみ悩みが解決され、全体的、継続的

な幸福や満足が得られるものでなければなりません。そのためには、精神全体が常に健全であり、肉体と精神とを含めた全人格を完成させることが求められているということになります。

ところで、健康で完全な「精神」というものは、健康で完全な「肉体」と同じように、なかなか得難いものであります。自らは丈夫で健康そのものであると思ひ、他人から見ても健康そうな人であっても、実際に精密検査してみると、肉体のどこかに欠陥があつたりして、完全無欠な健康体というものは滅多にないといわれております。それと同じように、精神や人格の面においても、自らにはまったたく欠陥がなく完全な人間であるといひ切れることのできる人は、ほとんどいないのではないかと思ふのです。

私たちは人間として、理想が高くなればなるほど、自らの不完全さや罪けがれの多いことに気づくようになります。そして、そこに新しい苦しみや悩みが起ることにもなるのであります。このように考えてきますと、肉体の健康がこれで良いということではなく、常に病気の予防や健康管理が必要のように、精神の健康や人格の完成や管理においてもこれで良しということではなく、常に苦悩や悪心の予防や精神の健康管理に努めなければなりません。

この精神の健康管理が第二段階の信仰に当たるのであって、病気の予防や健康管理が病人だけではなく、健康者にも必要なように、精神の健康管理である第二段階の信仰は、苦しみや悩みのある人、不安のある人だけではなく、いやしくも理想や自覚をもった人なら誰もが必要とするものでなければならぬと思われまふ。

第一段階での関心は、現在の自らの苦悩だけの解決ということでありましたが、第二段階では、現在だけではなく、生涯にわたつての全体的、人格的な理想の達成という広い自己に眼が向けられています。

しかし、第二段階の信仰にしても、自分が中心であり、自分のことが関心の的でありまふ。すなわち、自分の欠陥を改善し、自分を完成させることに重点が置かれているからであります。

大乘仏教の信仰とは

第三段階の信仰とは、大乘のレベルの信仰に入っていくことになるということでありまふ。それは、自己を正しく観察することにより、自らの存在とは、自分だけのものではな

いということが理解されてくるからであります。個人の幸福とは個人だけで得られるものではないのであります。周囲の社会がすべて平和でなければ、個人の幸福も確保されないということでありましょう。

このあたりで、論点を少し整理いたしますと、第一段階の信仰では、現時点だけの部分的な自己を考えていましたが、第二段階の信仰では、現在だけでなく、過去から未来にわたる全体的な自己が、高い理想の立場から眺められてきたのであります。ところが、第三段階では、自己の存在は単に、自分の過去や未来だけのものではなく、同時に、周囲の社会環境とも密接に関係し、周囲からの影響を受けるとともに周囲の環境に対しても影響を及ぼすものであって、自己を自己だけのこととして考えるだけでは充分でなく、環境などを含めた全体的な立場から自らをとらえ直した自分の幸福を考えなければならぬということが求められてくるのではないのでしょうか。

自分の幸福というものも、自分の暮らし全体が、周囲の平和な社会のお蔭であり、多くの人々からの恩恵を受けているのでありますから、自らも、社会の一員として社会のため至少でも役立ち、周囲に迷惑をかけないように心がけることこそが大切なことではないでしょうか。そして、私たちの平和な暮らしも世の中全体からの贈り物であります。

仏教では、このようなことを「**回向**」と呼んで大切にしております。回向とは、「他の人たちが喜ぶことを、自らを後回しにして他の人へ先に振り向けること」をいうのです。回向された人はまた、他の人に回向するということになるのです。その行いがまた巡り巡りしながら、やがて自分の方へと回向されてくるのです。このような考え方、世界観、人世観、人生観が大乗仏教の根元的な価値観なのであります。

世界はすべて、**縁起**によってつながっているのです。縁起によって象起しているのです。善い意は良い縁起を象起し、悪い意は悪い縁起を生ずるのです。

私たちはまず、自らの幸福が社会全体からの回向によるものであることに気づくことでもあります。そのことによって、世の中を明るくすることの意義を理解して、第三段階の信仰者となるのであります。

大乘仏教の第三段階の信仰者とは、いわゆる菩薩行に生きようと努力する人たちであります。「菩薩行を希求する人たち」とは、限りなく悟りに近づいている人格の信仰者であります。菩薩行とは、周囲の人たちの不幸や欠陥を取り除くために、自らの苦難を顧みることなく、苦しみの社会や状況の中へ進んで飛び込んでゆく人たちの行為を指すのであります。

世の中がほんとうに良くなり、世界中の人たちが平和で幸福になるためには、この第三段階の信仰こそが最も大切であり、必要でありましょう。そして、すべての人たちがこのような世界観を共有し、人生観に生きることが理想でありましょう。

大乘仏教では、第一段階や第二段階の信仰だけではなく、この第三段階の信仰を強調するものであります。

人類の歴史と人格の生成

私たちの人生、私たちの存在というものは、時々刻々の瞬間の積み重ねであり、時々刻々をいかに有意義に過ごすかによって、人生の意義や、価値が定まると思うのです。

曹洞宗の開祖、道元の歌に、次のような一首があります。

徒らに、いたずら すごす月日は多けれど、つきひ 道を求むる、みち 時ぞすくなき
《道元》

人生を思うとき、いい得て妙の一首です。一刻一瞬をやたらに過ごしてはならないこと

が理解できると思うのです。一刻一瞬の積み重ねの行動がその人の知能や性格となり、また肉体的な体質などを構成し、体質などにも影響を与えていくものと考えられます。それらの知能、性格、体質などを総合して「人格」と呼ぶことができましょう。つまり、私たちがこれまで経験し、実践してきたすべての行為の「習慣力（業）」が蓄積されたものにはなりません。これは、私たちが生まれたあとの経験だけを考察したのですが、実際には、人類発生以来の気の遠くなるような遠い祖先の生活体験などが、私たちひとりひとりに受け継がれて、潜在的な習慣力というか、祖先の生活体験の知恵といったものが、私たちの遺伝子に取り込まれ、刻み込まれて、引き継がれてきているというわけでありましょう。人類全体としての総合的な習慣力と、その人特有の、つまり、直系的な祖先の習慣性などの入り交じった、複雑で微妙なものなどが受け継がれていると思われます。そのようなことも、私たちの個性を形づくっている要因とも考えられましょう。そのようなことを要因とすると、私たちの人格それぞれは、固有の知性や知能、性格、体質、などをもった複数の人格の集まったものと見ることでできそうです。

私たちは母親の胎内において、十月十日（とつきとおか）の期間の途中で、「生物としての何十億年間かの歴史を、凝縮したものを経験してから誕生してくる」といわれております。その悠久

の時間の流れが母親の胎内で、ものすごいスピードで再現されるという不思議は、人間の理解の範囲を超えております。誠に「不思議」という以外に表現することばが見当たりません。

「個体発生は系統発生を繰り返す」というものですが、この種全体の進化の形態が、それぞれの個体においても反復されるという神秘は、もしかしたら、私たちの生命は、遠い祖先の無限ともいえる過去を胎盤にして、圧縮されながら生み出されてくるのかも知れません。

現在、生命科学の分野はすごいスピードで進歩しています。近い将来、このような謎が解き明かされる日が来るかも知れません。宗教も科学も目指す頂上は同じであります。宇宙の本質を正しく理解して、人類を含めた命あるものすべての幸せに役立てることです。アインシュタインの言葉にもありましょう。

「宗教のない科学は不具、科学のない宗教は盲目」《アインシュタイン》

科学には正しい宗教性が必要なのです。宗教にもまた、正しい科学性が求められている

ということでありませう。そのどちらが欠けても、命あるものの幸福に役立つことはないと思われませう。

宗教と科学の相依性

釈尊しやくそんの説かれた古い經典の中に、「二束にそくの芦束あしたば」という教えがあります。

「舍利子しゃりしよ、よく聞くがよい。ここに二把にばの芦束あしたばがあるとしよう、この芦束は互いに相依りて立つであらう。もし、その芦束の片方を取り去ったならば、どのようになるか。残りの芦束も倒れるであらう、舍利子よ、このようなことを相依性というのである」

「相依性そういししょう」とはつまり、「縁起えんぎの法ぽう」を象徴した譬え話であります。「縁起えんぎとは、一切いっさいの現象げんしょうしているものすべて、複数のものに依る」と説いているのです。すべて形あるものが形として現象しているということは、他のものとの縁を得ることにより成り立っている

途中省略

本編はダウンロード時間短縮のため省略版でお届けしています。
途中省略なしの完全版をご希望の方は製品版をご「購読」ください。

著者プロフィール

桜庭 雲水 (さくらば うんすい)

1930年、秋田県に生まれる。

1945年、大館桂城小学校高等科卒業。

神奈川県相模陸軍造兵廠、北海道三菱美唄炭礦、大成道路(株)を経て、
現在、福島県に在住する。

般若心経と生命科学

2007年 3 月15日 電子出版発行

著 者 桜庭 雲水
発 行 者 瓜谷 綱延
発 行 所 株式会社文芸社

〒160-0022 東京都新宿区新宿1-10-1
電話 03-5369-3060 (編集)
03-5369-2299 (販売)

<http://www.boon-gate.com>

© Unsui Sakuraba 2007 Corded in Japan

ISBN4-286-01783-4

(文芸社発行の通常書籍(紙の本)については、全国書店でお尋ねいただくか、「文芸社ON-LINE」
サイト、<http://www.bungeisha.co.jp> を御参照ください。)

新 07.03.06 M.S.